

こころの エッセイコンテスト

“あのときは ありがとう”。

心にほんわかと灯がともる、そんな瞬間がきっと誰にでもあるはず。

身边にある出会いや何げない一言など、

些細な事でもあなたの心を動かした、

眠ったままの思い出を書いてみませんか。

改めて思い返せば、その大切さに気づくことでしょう。

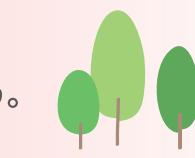
今回は、長く続いているコロナ禍での

つらい思いや不安な時期を支えてくれた言葉や心の交流など、

落ち込んでいた心を救ってくれた体験エピソードを募集します。

応募作品は書籍に収録される場合も。手書きで綴るはがき、

書き慣れたメールなど、表現しやすい方法でぜひご応募ください!



テーマ
**心から伝えたい
ありがとう**

特別テーマ
私の心のワクチン



対象 子どもから大人まで

2023年

9月4日(月)（必着）

詳しい応募要項は裏面をご覧ください

あなたの
応募作品も
本になる!?

これまで、数多くの応募作品が河出書房新社より単行本や文庫本となり、書店で発売されています。あなたの思い出が本となり、読者に感動を与えるチャンス！自分の作品が本になる、そんな夢にチャレンジしてください。



主催：公益社団法人「小さな親切」運動本部

後援：日本郵便株式会社／読売新聞社

協賛：株式会社河出書房新社

発行：株式会社河出書房新社

こころのエッセイコンテスト

応募方法

いづれかのテーマにそった体験とタイトル、住所・氏名(ふりがな)・年齢・職業または学校名・電話番号を明記の上、下記方法でご応募ください。

はがきから

文字数は、はがき1枚に収まる程度、手書きでなくても可。郵送で応募。テーマ氏名等は文字数に含みません。

メールまたはフォームから

専用メールアドレスまたは、「小さな親切」運動本部WEBサイト内応募フォームから応募。文字数は600字以内(はがき1枚相当)。

※応募作品は自作・未発表のものに限ります。

※応募作品の所有権及び著作権は、公益社団法人「小さな親切」運動本部に属し、応募作品は返却いたしません。

※応募作品は当団体WEBサイト及び情報誌『小さな親切』等で紹介する事があり、その際作品のタイトル変更及び補作を行うことがあります。

※入賞・入選全作品は、本部発行の作品集に収録されます。

※選外作品も書籍発行時に作品収録の可能性があります。なお、その際は事前に通知いたします。

※作品応募にあたってご提供いただきました個人情報は、コンテスト運営上必要な利用目的の範囲内(入賞者へのご連絡、賞状及び副賞の発送、新聞・WEBサイト・作品集における発表等)において利用いたします。



送り先

公益社団法人「小さな親切」運動本部

はがきキャンペーン係

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-20-4

TEL:03-3263-2866 FAX:03-3263-3838

メールアドレス hagaki-oubo@kindness.jp

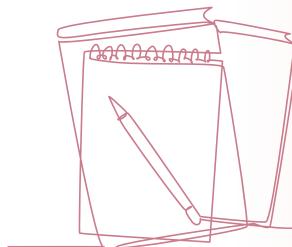
WEBサイト <https://www.kindness.jp/>

賞

大賞	1名
日本郵便賞	1名
読売新聞社賞	1名
河出書房新社賞	1名
審査員特別賞	1名
入選	20名

副賞

上位賞……切手・図書カードなど
入選……図書カードなど



第38回はがきキャンペーン
読売新聞社賞受賞作品



人をつなぐのは、
日々の生活にある
ほんの小さな親切や
思いやり。
そんな豊かな心を、
これからも
未来へつなげます。

2023年11月上旬

入賞発表

読売新聞および情報誌『小さな親切』、
「小さな親切」運動本部WEBサイト等で発表

2023年11月24日(金)

全国表彰式席上

「あの日の双子ベビーカー」

平成最後の夏に、双子を出産した私。それからは怒濤の日々だった。

「一歳まで頑張れば楽になるよ」
周りにそう言われてがむしゃらに一年頑張ったけれど、ちっとも楽になんてならなかった。とはいって、腰が据わり、つままり立ちもでき、夜泣きも減り、楽になった部分もある。でも、食事は一日三回幼児食作って食べさせたり、母乳とミルクだけのほうが楽だし、歩けるようになると行動範囲が広がって大変だった。

その日も、理由もわからず泣く双子をベビーカーに乗せ、とりあえず家を出たが、靴下を脱いでボイする双子に気を取られ、溝にベビーカーのタイヤを脱輪させてしまった。

双子は無事だったが、双子ベビーカーは重くて奮闘していると、サッと中学生が走ってきた。脱輪したのは、中学校の校庭脇だったので。彼は友人を呼び、あっという間に溝からタイヤを出してくれた。

「本当にありがとう。授業中?」

「部活中だから、先生に言ってきた」

「こいつも双子なんですよ」

「自分は双子で良かったけど、親は大変だったんですね。双子、おもうろいすよ」

そう言って、彼らは戻っていました。彼らとのわずかな会話の間に、双子は泣き止んでいた。すぐに駆けつけてくれた彼らの思いやりが、心にしみた。そうか! 双子、おもしろいか。いっちょ、頑張ってみるか。

この夏四歳になった双子は、とても仲良しだ。双子で良かつた、そう思ってもらえるように、これからもママ頑張るよ。

あの日の少年たち、本当にありがとうございます。